

邑南に伝わる 料理と食文化

邑南町食の推進員協議会
食文化サークル



行事食

花見(ひな節句)



ひな節句は女の子の成長と幸せを願い、祝う行事です。

この地方では、旧暦の3月3日(4月3日)に「花見」といって、よもぎの若芽をつんでよもぎもちをついたり、すしを作ってお祝いしました。

この日は仕事を休んでのんびりと春の1日を過ごしました。子ども達はそれぞれごちそうを重箱に詰めて、近くの小高い山や丘に登り、むしろやごぎをしいて花見をしながら食事をしたり、遊んだりして1日を楽しみました。

昔はひな人形を飾ることのできる家はあまりありませんでしたが、昭和になってから都会風に飾る家も出てきたようです。

花見は、これから農作業が本格的に始まる折り目(節)としての行事でもありました。

泥落とし



昔の田植えは近所の家と組んで手間がえで行い、隣近所がお互いに田植え仕事を手伝いあっていました。

田植えが終わった後は、泥落としといって疲れをいやすために2日位農作業を休んで、まきもちや寿司などのごちそうを作り、近所の人と集まって苦労をねぎらいました。

泥落としには、田植えなど田仕事でついた泥を落として身を浄め、農神に祈りをささげるという意味もあります。

お盆(うらぼんえ)



お盆はご先祖様の霊をお迎えし、供養をする仏教の行事です。あの世から亡くなった方々の魂が戻ってくるといわれ、お供え物を用意してお迎えします。

仏教行事の「盂蘭盆会」(うらぼんえ)を略して「お盆」といいます。もともとお盆は旧暦の7月15日を中心に行われていました。昭和初めまでは、高原、布施、羽須美地域は9月1日から3日までの9月盆でした。現在はどの地域も8月13日から15日までの8月盆となっています。

昔は作物収穫の感謝の行事の意味もこめられていて、今もその名ごりでお米の粉で作った団子やそうめんなどをお供えします。他にも、亡くなった方々の好物を供えてその魂をしのびます。

秋祭り



秋は豊作祈願と収穫感謝のお祭りが行われます。

もともと秋祭りは「収穫をもたらしてくれた田の神様に感謝して山へ送り出し、春にはまた山をおりて豊作をもたらしてくれるように祈る」という意味がありました。

今では、家族で楽しみ、地域のつながりを高める行事となっています。

祭りには、親せきが集まり、寿司や手料理の詰まった重箱を開いて酒を飲み、よごろ(祭り前夜)には明け方まで奉納の神楽を見て楽しみました。

昔は神社の参道にわたがしやニッケ、ラムネ、ポン菓子、まんじゅう焼きなどの露店が立ち並び、たくさんの人で混み合うほどにぎやかだったそうです。

正月(おせち料理)



年末には正月用の餅つきをしました。ひと白めで神仏に供える鏡餅をとり、その後は雑煮用の平餅にしました。平餅は正月や節句、家の祝い事につくハレの餅です。

昔は元日から3日までの「三が日」は白い餅の雑煮を食べましたが、普段はもち米にくず米や雑穀、山草などを入れたませ餅(てんこ餅)をご飯の足しとして食べていた家がほとんどでした。「正月や2日3日はよけれども 4日の朝のてんこかなしや」という歌もあります。

正月は、新しい1年の幸せを守り、豊作をもたらす「ととこさん」(歳神さま)を迎える大きな行事として、昔から大切に祝われてきました。

歳神さまへのお供えとしておせち料理をつくり、大晦日にはその料理を家族でいただきます。この大晦日が一年中で一番のごちそうの出る夜でした。神様に供えた物を食べるのは、神様と同じものを食べて、その力を分けてもらい、1年間を幸せに過ごせるようにという意味があるからといわれています。

煮しめ、黒豆、きんとん、なます、かまぼこ、数の子などのおせち料理を重箱に詰め、日頃忙しく働いている女性もゆっくり休みました。

正月(おせち料理)



年末には正月用の餅つきをしました。ひと白めで神仏に供える鏡餅をとり、その後は雑煮用の平餅にしました。平餅は正月や節句、家の祝い事につくハレの餅です。

昔は元日から3日までの「三が日」は白い餅の雑煮を食べましたが、普段はもち米にくず米や雑穀、山草などを入れたませ餅(てんこ餅)をご飯の足しとして食べていた家がほとんどでした。「正月や2日3日はよけれども 4日の朝のてんこかなしや」という歌もあります。

正月は、新しい1年の幸せを守り、豊作をもたらす「としとこさん」(歳神さま)を迎える大きな行事として、昔から大切に祝われてきました。

歳神さまへのお供えとしておせち料理をつくり、大晦日にはその料理を家族でいただきます。この大晦日が一年中で一番のごちそうの出る夜でした。神様に供えた物を食べるのは、神様と同じものを食べて、その力を分けてもらい、1年間を幸せに過ごせるようにという意味があるからといわれています。

煮しめ、黒豆、きんとん、なます、かまぼこ、数の子などのおせち料理を重箱に詰め、日頃忙しく働いている女性もゆっくり休みました。

節分



節分とは「季節の分かれ目」という意味です。旧暦では「立春」で冬が終わり、春になって新しい1年が始まると考えられていたので、立春の前日である「節分」は大切にされ行事として伝えられてきました。

節分の日には「鬼は外、福は内」と唱えながら、家の出入り口や座敷中に炒った大豆をまきます。豆まきには冬の寒さや病気など人に災いをもたらす鬼を退治するという意味があります。

豆まきのあとは自分の歳の数の豆を食べて、1年の無事を祈ります。

昔は母屋の隣の駄屋である牛舎にもわらすぼに入れた鯛の頭をぶらさげたり、玄関先にひいらぎをたてて鬼が入ってこないようにと願いました。

また、砂おろしといってこんにゃくを白和えなどにして食べました。

